

## 教育心理学教室メンバーの研究状況報告

況から決して眼をそらせてはならないのである。社会運動的機能を推進していく一翼を、より強力にになって歩むべきだと私は考える。

3. こうした視点に立って、精神病患者への接近も、従来主として準拠していた、ともすれば、個人主義的・心理主義的水準からの超越が要請されてこよう。八事病院を臨床の場として実践してきた、私のC. P.としての活動は、この年、研究の段階でも、関心はひろく、そうした病者の背後に向けられてきた。44年10月、日本臨床心理学会第5回大会で報告し、教育学部紀要第16巻（'69）に掲載された「同一家系内に同時に多発した精神病患者の家族研究」はこうした視点に立つものであり、それを第1段階として、今年なおその対象を追いつづけているのである。同じく八事病院においてなされ、臨床心理学研究9巻1号（'70）に掲載の論文「評定法によるS. C. T. 分析の試み」は、42年4月、東海心理学会第16回大会で報告された研究のまとめであるが、非定型精神病患者の臨床像の変化との関連を、医師の協力を得ながら総合的に追ってきたものであるにしろ、その時点における問題意識として、なお甘いものがあつたことを否定できない。

4. 多年にわたる私自身のRorschach研究の視点も、ここ数年、次第にその重点がうつりつつある。「ロールシャッハ・テストのサインアプローチをめぐって」と題するシンポジウムは、日本臨床心理学会第5回大会のスケジュール変更によって、実現をみなかったが、そこで提案しようとした「ロールシャッハ法への現象学的接近」の試みは、ここ数年、私たち、現象学研究グループの、ささやかながら積み重ねてきた討論の集積であり、ロールシャッハ・サインのいたずらな一人歩きに対する反省を投げかけ、かけがえのない歴史的一回的存在である人間への深い関心をよびもどそうとの意図をもつものである。45年度東海学術奨励金を得て、現在なお、私たちの討論をひきつづき深めているし、この間の研究の展開に関しては45年8月、日本心理学会第34回大会のシン

ポジウム「臨床的問題に適用された理論と技法」における「投映法の治療的接近」という主題での問題提起の中でのべられた。

5. こうした、悩める生きた個としての人間存在への深い関心は、私自身の研究課題の今ひとつの柱ともいべき、精神薄弱児への接近にも新しい展開を、私の中によびさましている。今夏、愛知県心身障害者コロニー、はるひ台学園における、重度精神薄弱児に対する私どものとりくみは、私にとって、またきびしい衝撃であり、精神薄弱児に対する私のまた新しい開眼であったともいえる。これら子どもたちとのかかわりの体験は、「重度精神薄弱児に対する人間学的接近（序報）」として、45年10月、東海心理学会第19回大会に報告され、この紀要第17巻にまとめられている。

精神薄弱児に対する今ひとつの接近は、ここ数年にわたる、金沢大学宮安芳和らとの共同研究、「精神薄弱児の適応行動尺度に関する研究」である。44年度、文部省の科学試験研究費を得て、具体的な適応行動尺度の日本版作成の段階に到った。精神薄弱児に対する判別基準をめぐる論争の中から、問題の提起がなされ、知能とならんで適応行動の水準をはかることによって、判別の指針たらしめようと意図するとともに、それが具体的な指導の上にも、より積極的に有効に利用されることをねらいとするもので、今年度そのための研究費は特別に得られなかったけれど、北海道地区をもふくめてのサンプル蒐集に努力し、その標準化を十全のものたらしめようと期している。45年10月、日本教育心理学会第12回総会における報告はこの研究についての今日までの経由成果のまとめである。

これら精神薄弱児に対する研究の視点も、私なりに、私のうちには、次第に統合されてきている。ともあれ、大学斗争をとおして、自己課題として自らに問いかけてきた、私自身の研究に対する基本的姿勢を常に忘れることなく、私はそれぞれの領域における私自身のささやかな研究の歩みを今後もふみしめていきたいと考える。

## 研究の経過と方向づけ 大橋正夫

### 個人研究

私の研究の最終的な目標は、対人関係の心理学の体系を樹立することである。この道は遠く、険しいが、現在のところ次の三つの方向から少しずつ手がけている。

1. 対人関係の心理学的構造：対人関係という語は、

日常的のみならず、心理学用語としても広く使用されている。しかしこの概念的定義はまだ定かではない。私は本年度学部において「対人関係の心理学」を開講した機会に、この問題をいささか考究した。まだ明白な理論を提出する段階にはないが、その枠組を得かかった状態にあるといえる。これまで私は対人関係を理解する枠組と

しては、態度の概念を用いてきた。すなわち、対人関係は主として対人的態度として記述できる、とした(1)。しかし、態度の対象はきわめて広範であり、対人的態度をそれらと同列におくことは適切さを欠くかもしれない。そこで次に考えたのは、**sentiment** の概念である。これは、ある対象に対する感情的反応を規定する個人の組織された準備態勢である。態度は行動の準備態勢であるとされるが、対人関係は必ずしも **overt** な反応となって表われるとは限らないので、**sentiment** の方が適しているといえる。なお、これは情操と訳すのは不適當で、むしろ「感情傾向」と訳した方がよい。ただ、**sentiment** という概念では、対人関係の **affective** (これは「情動的」と訳すのが適切であると思う) な側面はカバーできるが、今一つの重要な側面、すなわち認知的な側面が含まれないという欠点がある。その点では **complex** の概念がすぐれているが、この語は病理的な含意をもつので、これまた適當ではない。

2. 印象形成：実証的な研究としては対人関係の認知的側面をこれまで多く手がけてきたし、これからもそうなるであろう。これはいわゆる **person perception** の領域である。私は従来はこのうち、主として関係(殊に三者関係)の知覚の問題を研究してきた。これからは、パーソナリティの知覚の問題に手をひろげていく考えである。さしあたっては、比較的浅い関係にある人の間のパーソナリティ知覚、すなわち印象形成の問題に焦点をさぼる。本年度は、学科決定のために教官に面接を受けた2年生と教官を対象にした印象の問題について学会報告をした(2)。次には、写真を用いて、未知の人について形成される印象を分析したいと考え、現在準備中である。人は初めてある人を見るとき、直接的に得られる情報は限られていても、ある特性間に相関があるという経験的に得られた知識(いわゆる **implicit personality theory**) に援けられて、推測によってかなり統一のとれた印象を形成する。その過程は一般に無意識的であるが、多くの成人がもっている、かかる知識の体系を明らかにしようと思っている。

3. バランスモデルと加算モデルの比較検討：架空の人物を表わす特性として数個の形容詞を与え、それから形成される印象を分析して、**S. E. Asch** が「中心的特性」という概念図式を提出したのは1946年のことである。これによって印象形成の問題の研究の端緒が開かれたのであるが、彼のこのゲシュタルト的考想は現在重大な挑戦をうけている。これが **N. H. Anderson** らのいわゆる加算モデルである。これは、複数の刺激の集合の刺激価は個人の刺激の刺激価の単純な加算によって予測できる、ということを骨子とする。これは印象形成の

領域で問題にされたのであるが、これを対人関係の **affective** な側面に適用すれば、次のごとくいえる。ソシオメトリック・テストによって集団内の各成員に対する被験者の **sentiment** が明らかになっていれば、成員の集合に対する彼の **sentiment** が簡単に予測できる。これに対して、バランス・モデルは、成員間の関係の **configuration** が重要であると主張する。両モデルの限界を明らかにするための研究を現在進行中である。

### 共同研究

当教室の塩田教授および小森助手と共同で、学習心理学と社会心理学の境界領域の問題を研究してきている。その第一段階の成果は、本巻の他のところに報告している(3)。私が主として担当したのは、このうち、知能テスト、学力テストおよび「学習環境テスト」の相互の関係の分析である。なおこの一部は学会でも発表された(4)。

現在は、「集団における問題解決」について共同研究が進行中である。そこで私が主として分担しているのは、問題解決活動にともなつて生ずる集団構造の変化をどのようにして測定するかという問題である。

### 〔註〕

- (1)大橋正夫：「社会・集団」, 阿部芳甫編, 心理学, 1960, 誠信書房・なおその後、対人関係が相手に対する「期待のマトリックス」として把握できることを示した。(「集団の構造と機能」, 近藤貞次編, 社会心理学概論・1968, 朝倉書店)
- (2)大橋正夫：「パーソナリティ印象の相互作用」, 日本心理学会第34回大会, 1970
- (3)塩田芳久・大橋正夫・小森孝彦：「学力診断のためのテスト・バッテリーの研究」, 名大教育学部紀要(教育心理学科) 17巻, 1970
- (4)塩田芳久・小森孝彦・大橋正夫：「学力診断のためのテスト・バッテリー作成の試み(その1・2・3)」, 日本教育心理学会第12回総会, 1970